
我の小説は偉大なり

石本公也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我的小説は偉大なり

【NZコード】

N9079X

【作者名】

石本公也

【あらすじ】

「部活くらい入った方がいいよ」

親や友達にそう言われて、俺は文芸部に入った。其処にいたのは、自称
天才小説家。しかもその文芸部は、同好会としても認められていないただの集まりだった！

其の者、明らかに異常なり（前書き）

」の物語を見つけて下せりて、ありがとうございます。彼らを見て、面白いと思つて頂けたら幸いです。

其の者、明らかに異常なり

「部活くらい入った方がいいよ」
親や友達にこう言われた俺は、その扉の前に立つて、扉を開けた。
「なんだ君、新入部員か？」

「あーっ、ようやく授業終えたーっ！」

今日最後の授業が終わり、俺は大きく伸びをした。

「喜びすぎたっての。お前はこれから家に帰んのか？」

俺の後ろにいる男子生徒、誠人まさとが声をかけて来た。教室は授業が終わったからか、ガヤガヤしている。

「まあな。お前はこの後部活だけ？」

誠人は、バスケットボール部に所属している。疲れたとか言つてゐるけど、それでも続ける。

「ああ。お前も部活やつてみろよ。楽しいから」

誠人は笑顔で言つた。廊下から先生が入つて来て、ガヤガヤしていだ教室が静かになる。先生はHRホーミルームを始めた。

「楽しいってもなあ」

俺達も声を落として喋り続けた。

「別にバスケに誘つてるワケじゃねえよ。お前も夢中になつて何かしてみろよって言つてんだよ」

誠人は俺が中学校はつまらなかつたとぼやいてたからだろうか、高校で何かさせたいらしい。正直思つ。オカンか。

「じゃあ検討してみるよ」

俺はそう言つて鞄を持ち、立ち上がつた。

「良いトコ入れると良いな」

そうして帰りの挨拶をして、俺は帰つた。

俺は家について、自分の部屋に入り込んだ。ベッドの上に乗り、ゲームを起動する。

部活と言つても、俺は運動なんかできない。何かに一生懸命になるのは気持ちが良いのだろうが、疲れるのはいやだ。汗臭く泥臭く何かに一生懸命に打ち込むのは、爽やかスポーツマンがやつてゐる。その時、俺の部屋の扉が開いた。

「帰つてきたなんならちゃんと言つてよね。それに、ゲームばっかりしてるのは勿体無いわよ。それだつたら部活くらい入つたら？」母親だ。母は洗濯物を持つてすぐに出で行つた。それにしても、ゲームばっかりしてるのは勿体無いかあ。でも何にもする事無いしな。

……部活、ねえ。

そう思つた俺の前で、ゲーム画面はGAME OVERの文字を表示していた。

「部活つて、今更ながらどんなのがあるんだ？」

次の日の放課後、俺は誰に言うワケでなく、ポツリと言つた。だが後ろの席の誠人は聞こえてた様で、つつかつて來た。

「お前部活入るのか？どこにすんだよ？」

何故か目を輝かせて聞いて來た。

「だけど運動すんのは嫌だからな。樂なのはないのかな？」
「樂なのは無いと思うけど、運動が嫌なら文化系の部活に入ればいいじゃねえか」

誠人の言葉に俺は一瞬止まった。ゆっくりと後ろを向き
「そうだよ。文化系の部活があつたよ」

驚きの表情を隠さずに俺は言った。

「お前、部活には文化系もあるって忘れてただろ」

呆れた表情を隠さずに誠人は言った。

「誠人、文化系の部活って、どこに行けばあると思つ？」

「お前つい最近説明されてただろ……旧館にあるよ」

その言葉を聞いて、俺は立ち上がった。

「サンキュー」

そして、旧館へと、足を向けた。

其の者、明らかに異常なり。 2ページ

旧館についたは良いが、俺は何処の部屋に行けば良いのだろうか。旧館の中を回つてみると、一つの、少し古い感じの扉が田に付いた。俺はその扉の前に立つた。

ここも部室なのだろうか、だとしたらどんな部活をしているのだろう。

俺は、その扉を、勢いで開いた。

その中にいたのは、長く、美しい髪を讃えた美少女だった。その美少女は、俺に気付くと

小首をかしげ、

「なんだ君、入部希望者か？」

しっかりとした声で、そう言った。

「なんだ君、入部希望者か？」

グラウンドから野球部かサッカー部の掛け声が聞こえる午後の学校。そこの部室棟として使われている旧館の一室に入ると、美少女がいた。その人は、俺を見てそう言った。

「え…いや、なんて言うか、……見学？…みたいな感じで…」

俺は取り敢えず笑顔で答える。

「見学？なら君はまだ部活に入っていないのか！」

俺の前にいた美少女が、パッと顔を輝かした。と思ったら

「君、名前は？」

いきなり名前を聞いて来た。

「？……山陰龍夜」

なんで俺は答えたのだろうか、小学校とかで知らない人に名前を教えてはいけませんって習つたはずなのに……まあ、ここは学校だし、大丈夫か、

「では山陰君、今日から君は文芸部の一員だ。……あつ入部届けは我が顧問に出しておくから問題ないぞ。」

いや違つた。問題あつた。この人今なんて言つた？

「あ、あの！俺は見学に来た訳で入部するとは言つてないんだけど？」

「せつかく來た者をみすみす返すワケにはいかんな」

何時の間にか俺の背後に來ていた彼女は、ドアを閉めて、鍵をかけた。つて

「何してんの？」

俺は彼女に問いかけた。

「まあ落ち着けよ新入部員。今からこの文芸部について教えてやろう」

彼女は俺の質問を無視して机に腰掛ける。

俺はもうどうやつても部員になる様だ。しうがないので俺は近くにあつた椅子に座つた。

「文芸部とは、一般的に本を読んだり書いたりする部活だ」

そう説明していく彼女。窓の外は、もう暗くなりかけている。ふと、気が付いた事があつたので俺は彼女に問いかけた。

「ところで……他の部員は？」

すると、彼女は驚いた様にこちらを見た。何かいけない事でも聞いてしまつたのだろうか、しかし、他の部員の事を聞いただけでこんな反応するか？

俺が内心であたふたしていると、

「部員は……我と山陰君だけだ。」

彼女が静かに言つた。

この学校——公立 花山南高校は、部活動に色々とルールがある。よく生徒手帳なんかに書いてある決まりことだが、その中に、部員と部活と言つ項目がある。

部を作るとき、部として発足する前に、必ず同好会として発足しなければいけないのだが、その同好会には、必ず五人以上部員がいなければいけない。十人集まればぶに昇格出来る。だが元々部だった所が、廃れて行つた場合、五人未満になつたら即廃部と言つ悲しいシステムも存在する。

つまり、文芸部は、文芸同好会としても発足していない、ただ部屋を持つてゐるだけの集まりである。

この部——いや、この集まりは、まだ同好会としても活動で来ていらない。

そんな所に、俺は入部させられた。

部員は俺を含めて二人。もう一人は、ビックリしてしまった程の美少女だった。

「二人……？」

俺はつい聞き直した。どんな学校でもありそうな文芸部員が、だつた今入った俺を含めて二人？

「ああ、最近は漫画研究会の方が人気があるし、映画同好会に入れば、自分の作ったシナリオで映画を作ったりしているからな。地味な文芸部には、誰も入らない」

そう言って悲しそうな顔をする少女。

「じゃあ、なんでお前はそっちにいかないんだ？ 映画とかにして貰えるんだろ？」

「お前と呼ぶな。私は日之道灯だ」

美少女——もとい灯は、そう言うと机から降りた。そして部屋を暫く歩き周ったあと、大きく息を吸って灯は言った

「我が文芸部に居るのは……我が、天才小説家だからだ！」

……………えつ？

今こいつはなんと言った？

「天才小説家？」

ナルシストなのか？

「ああ、我はこの学校で才能を見せつけ、ゆくゆくは、大きな場所で小説を書くのだ！だが文芸部が活動出来なければ意味が無い。そこに山陰君が来てくれたのだ」

少し興奮気味ではなす灯。別にデビューしたいなら部から始めなくともいいと思うのだが……でも天才小説家って自負してるんだよな。だつたら……

「自分の事を天才小説家と言つくらいなんだから、小説は書いてんだよな？見せてみろよ」

俺は椅子から立ち上がりて灯に言った。

灯は、「良いだろう」と言って部屋に一つだけある棚から、数枚の紙を取りだした。

灯が差し出した紙を受け取つて、俺はそこに書いてある文字を見て「小学生の作文か！」
かなり大きい声で叫んだ。叫ぶしか無いだろう。
だつてそこに書いてある文章は、

ある所に一人の人人がいました。

その人は異世界に行きました。

その人は異世界から帰つてきました。

ハッピーエンドです。

……かなり、いやほんと、いやまさに超がつく低レベルだった。

「小学生の作文？この我の文章を読んでの感想がそれか？」
灯が不機嫌そうな目を向ける。

「この文で才能を感じれたらおかしいだろ」

「なんだと？我の物語は稚拙ちせつと言うのか？」

「どう見ても幼稚よじゅだろ？なんで異世界に行つたのに異世界での事が書かれてねえんだよ！あとなんで一人称が我われなんだ？」

「何故今そこを…我と先程から言つていただろう。あと異世界での

事は思いつかなかつたのだ！」

「思いつかなかつたなら書くなよ！それより最後のハッピーエンドつてど！」——これハッピーハンドつて書くな！描^トしろよ最後ぐらい！」

——

出会いでまだ数分のはずなのに、なんで言^トい合^ハう事が出来んだろ？

なあ俺達。

灯はこちらを睨んでいる。そのままビームを出しそつなくらい鋭い目つきで……

「お前、我に意見するからには、小説を書けるのか？」

灯が睨んだまま俺に言って来た。

俺は小説は書けない。だが、あの文章を見た後、灯にそつ言つのはなんか負けた氣がする。俺は多分、今相当引きつった顔をしてるんだろう。

「……少なくとも、……お前よりは、

これ以上顔が引きつらない様にして、俺は言つた。

「……ならばお前が我をコーチしろ……」

「コーチ？」

てつくり今ここで書いてみると嫌味なことを言われると思つたのに、コーチしろ？

「ああ、山陰君は以外と我の文章に指摘していた。的確にな。だから君にコーチをお願いしよう」

灯は何か思いついた子供の様な顔をしている。顔の横にニヤリと文字が見えそうだ。

「我の才能に君がコーチをする。そつすれば、さつといの部活は学校で一番人気の部活になれるだろ？」

学校一？そりや大層な事だ。

「どうだ？文芸部を人気の部活にしてみないか？」

なんだか、凄い事になりそうだ。

「面白そうだな。だが、人気になるかどうかは書かれる小説の内容

次第だぜ」

「ならば、決まりだな
灯はニヤリと笑つた。」

其の者、明らかに異常なり 3ページ（後書き）

いんにちは、石本です。

読んで下さった方に大きな感謝を。

文章力の無い自分が、文芸部で文章の物語を書くのは、あまりにも
無謀ですが、頑張っていきます。

さあ次回は、始まる部活。
お楽しみに。

其の部、みづやく始まつたものなり 1ページ

学校で一番人気の部活にする。

そうは言つたが、文芸部は、まだ同好会としても成り立つていない。まずは、部員集めが必須という事になる。

「成る程。確かに部と成立していなければ、活動を先生方に止められてしまうな」

灯は俺の説明に納得した様だ。

「で、どうやって集める気だ？」

部員は集めなくてはならないが、もう五月だ。殆どの人は部活を決めてしまっている。この状況で部員が簡単に集まるのか？

「とりあえず、ビラでも作ろう。なんでも良いから五人集めないと、我的小説を発表出来ない」

お前の文じゃ発表しても売れねえよ。

「ビラか…本当に効果があるとは思わないが、あつた方が良いな」

ビラなんて作つても、貼る場所なんて無いだろう。

「あとの間に誰か誘うしか無いだろうな」

灯は結構真面目に考えていた。

確かに、部として認められていない団体が、校内放送を使つたりは出来ない。結局、誰でも利用出来る設備を使うしかない。

「ところでビラって、どこに貼るんだ？」

俺はふと疑問に思つた事を灯に聞いた。灯は、真っ白な紙を取り出しながら言つた。

「そこら辺の壁にでも貼つておく。まだ部員募集の紙が剥がされてないんだ。新しいビラがあつたつて大丈夫だろう」

灯は俺の方に紙を数枚渡して、筆箱からペンを取り出した。

「……この紙は何だ？」

何も言わずに紙だけ渡されても、なにをするのか分からぬ。俺が

聞くと灯が

「ビラを考える」

短く返事をした。灯の手はもうペンを走らせている。俺も何か書いてみようとしたが、このビラと言つ物。なかなかに難しい。まず何をする部活かを書かなくてはならないし、人を惹きつける言葉も必要だ。だが俺は昨日入れられたばかりだし、この部屋の構造も理解していない。

とりあえず俺は、本のイラストの上に「文芸部員募集!」とだけかいておいた。

「出来たなら人目に付きそうな場所にはっておけよ、薄汚れた倉庫に貼つても意味がないのは分かるだろ?」「

灯はそう言つて立ち上がつた。もうすでに何枚ものビラがその手にあつた。

「帰りにビラを貼る事。勧誘は明日にしよう」「いや、また。と灯は部室を出ていった。そのあと、一枚しかできなかつたビラを持って、俺も部室をあとにした。

「で? お前はどこの部活に入ったんだ?」

誠人が教室で俺に聞いて来た。

「文芸部」

俺は短く答えた。

「文芸部? そんな部があつたか?」

誠人は嘘つき少年を見る様な目をしながら言つた。

「実際はない。部員も一人だし、部室は一応あるけど、顧問もい

ないし、同好会ですらない」

俺は机の上でほおずえをついている。

誠人は俺の言葉に反応した。

「二人？じゃあ、もう1人は誰なんだ？」

「日之道 灯つて言う人だよ」

短い問答の後、誠人は目を見開いた。

「日之道？お前、あの日之道さんと同じ部活なのか？」「何だ？知つてているのか？」

「知つてるも何も、同じ学年だろ？しかも日之道さんつていやあ、この学校で指折りの美人じゃねえか」

驚いた。灯は同学年なのか。ついつい灯と言つていたが、先輩だと思つていた。

しかもかなりの美人。そんな人が、文芸部で部員を集めている……直ぐに部員が集まりそうだ。

「で、何でお前が日之道さんと同じ部活なんだよ」

誠人がじつとりとした目を向けてくる。

それは警察官の様に、絶対に吐かせてやるぞと言つている様だ。

「文化系の部活を見ようと思つて旧館に行つたら、文芸部に入れられたんだよ」

段々答えるのが面倒になつたので、適当にこたえていく。

「入れられたじゃねえよ。何で日之道さんはお前なんかと文芸部にいるんだと聞いてるんだ」

誠人、お前しつかり言葉を理解してゐるのか？俺はどうして文芸部に入つたかを語つたのに、同じ質問をぶつけやがつて。

そう言おうとした時、教室に先生が入つて来て、自動的に切り上げとなつた。

其の部、みづやく始まつたものなり 2ページ

授業が全て終わると、再び誠人が問いただして來た。ここには俺の答えに納得してない様で、いい加減しつこい。

「だから、どうやって日之道さんに取り入つたんだよ」

「しらねえよ。扉開けたら入部させられたんだから」

「どうやつて入部させられる程親しくなつたんだ？」

さつきからこなんがずっと続いてる。もうやめて欲しいと思つた時だった。

廊下の方が騒がしいと思つたら、話題の中心人物、日之道 灯が顔を出した。

「山陰君はいるか？」

灯は教室の入り口に立ち、俺を呼んだ。

そして俺に集まる視線。

俺が近づいていくと、灯は微笑み、

「私は今日少しよるところがあるから、部室の鍵を渡しておひつ。そう言つて俺に鍵を投げた。よるとこひつじに用事があるのか？あと今私つて言わなかつたか？」

とにかく俺は鍵を受け取り、背中に刺さる目線から逃れる為に、真っ直ぐ部室に向かう事にした。

部室について、俺は何もする事が無かつた。文芸部と言つても、この部屋には本が一冊も無い。俺には灯が来るまで何をしようか悩み抜いた挙句、椅子に座つてただじーつと待つ事にした。

俺が椅子に座つてただぼーつとしている時だった。部室のドアをノ

ツクする音が聞こえた。俺は灯が来たと思つて扉を開くと、そこには、いかにもおつとりとした女性が、柔らかな笑みを浮かべていた。「ここにちは、文芸部に入りたいのですが」

肩を超えている程度のセミロングの髪を揺らしながら、その人は言った。

「あの…？」

俺がしばらく動けないでいたので、その人はもう一度言つた。

「あ。すみません。どうぞ中に。」

我にかえつた俺は廊下で立たせてはマズイと思つて、彼女を中に招き入れた。その人は「はい。」と笑顔で言つて、中に足を踏み入れた。そして俺が差しだした椅子に座ると、

「ポスターを見たんです」

と言つて來た。ポスターとはビラの事だらうが、本当に人が来るんだなーなんて俺が感心していると、

「山陰君。遅くなつてすまな…」

灯がやつて來た。俺はこの入部希望者の事を話そつと灯の方を見て、固まつた。

何故か、それは灯の横に、綺麗な髪を軽く縛つた女の子がいたからだ。

灯も固まつていた。俺しかいないと思つていた部室に、穏やかそうな人がいたのだから。

完全にフリーズした俺達。

「ここにちは。」

「こ、ここにちは…」

そんな中、入部希望者達は、お互にあいさつをしていた。

「とりあえず、説明して欲しい」
灯が溜息をつく様に言った。その前で、おうとりとした人が座っている。どこかの面接か。

「説明？あの、ここ文芸部ですよね？」

少し困った様な表情をして、俺を見る。俺を見られても困ります。

「確かにここは文芸部だが……まさかお前、入部希望者か？」

灯が聞くと、彼女は文芸部と分かって安心したようだ、

「はい。一年三組、木茎葉 きくは 香織 かおり とります」

と笑顔で言った。てか、同じ一年生なんだ…

一方、灯も入部希望者と分かつて、香織さんを受け入れたようだ。

「そうか、ならば歓迎しよう。山陰君、今日は凄いぞ。なんせ新入部員が二人入ったのだから」

「二人？」

さつき灯が連れていたあの子だろうか。そういうや狄アザミに行つたんだ？

「紗良自己紹介してくれ」

すると、机の影からぴょこっと、灯が連れてきた少女が顔を出した。そんなどこにいたのか

「一年五組、原田 はいだ 紗良。この部に入る」

そう言つて腕を組む紗良。ぶらつきぼうにしてるのではなく、子供が大人の真似をしている様に見えるのは何故だろう？

「ところで灯。お前原田さんと知り合いなのか？」

俺が聞くと、灯は眉をわずかに動かした。そして少し俯いて、顔をあげた。

「ああ、紗良とは同じクラスでな、いつも楽しく笑っているのに部活に入つてないと言うから、誘つたんだ」

そういう言われて、俺は紗良を見た。いや、紗良といきなり呼び捨てなのはやつぱりどうなのかな…まあいいか、心の中でだし。

「後一人で文芸部は正式な同好会になれる。だがその前に、せつかく入つて来てくれた一人を歓迎する。山陰。その棚から菓子を取り出せ」

そう言われて俺は棚に近づく。すると上段の方に、見た事ある袋が見つかつた。灯は部室に菓子を持ち込んでたのだろうか？

「お菓子？」

そして紗良が急に起き上がり、俺のてから菓子を取り上げると、勢い良く食らいついた。

その横で微笑んでいる香織さん。

「勢いが良いな。ところで山陰、部の活動つてどんな事を書けばいいんだ？」

「はい？」

俺は素つ頓狂な声をあげて灯を見た。

「ほら、ここに活動内容とその目的と書いてあるのだが、よく考えたら何を書けばいいのか……どうすればいいと思う？」

と言つて灯は俺に 新規部活動制作報告書 と書かれたを見せる。

「お前、この前文芸部は本を読んだり書いたりする部だつて言つてたじゃんか」

俺がそう言つと、灯は

「それだけでは…」

と、少し不安そうな顔をする。俺は頭をかいて、

「じゃあ俺が適当に書いておくから、その紙くれよ」

と言つて灯の手から紙を奪い取つた。灯はハツとして、俺の方を見たが、何も言えなかつた。何故かと言えば、灯が口を開こうとした時、紗良が

「お菓子、無いの？無くなつた」

と言つて来て、話が途切れたからである。

校内に、最終下校時刻を知らせる鐘が鳴つた時には、机の上に大量のお菓子の袋があつた。

食べ過ぎだね……

最終下校時刻を告げる鐘が鳴つたので、香織と紗良は帰つて行つた。俺は菓子の袋を片付けていた。灯はカギを持っているので、帰ろつとしないのだろう。

「山陰」

不意に灯が俺を呼んだ。

「なんだ？」

俺は袋を「ミミ」箱に押し込みながら言つた。

「その……わつき…我の事を、灯、と呼んでいなかつたか？」

俺に視線を合わせず、顔を横に向けている灯。しかし、その田はさつきからチラチラと俺の方を見ていた。

ここに俺は考える。灯と言つているのはあくまでも心の中で、呼ぶ時は【田之道】と呼んでいた筈だ。口にだして灯と呼んだだろうか？

「先程、紗良の事を聞いて来た時、我を 灯 と呼んでいた筈だと思つ……」

段々小さくなる声。俺はそれを聞いて、ああと呟いた。

——ところで灯、原田さんと知り合いなのか？——

あの時、灯が少し不思議な表情をしたのは、急に名前で、しかも呼び捨てで呼ばれたからか。

「確かに呼んでたな。…もしかして、いやだつたか？」

「嫌では無い。ただ、少し驚いてしまつただけだ」

「……………そういうやお前も、何時の間にか山陰つて言つてるな

「…………嫌か？急に名前で呼ばれたものだから、つい……」

「嫌じやない。てか、君とか付けられるとなんかこそばゆい。いつそ龍夜^{りゅうや}でも構わない」

なんの話をしているのだろうか？それなりに気まずい空気になつたので、俺は「じゃ、また明日」とつて部屋を出た。帰り道。俺はポケットから取り出した紙を見ていた。

新規部活動制作報告書。そこに書いてある事を読んでみる。

その一、部員数が五名以上いる事。そして、下の空欄に入部予定者の名前を必ず記入する事。

その二、活動場所を記入する事。他の部活動と場所が被っていた場合、学校の許可が降りなかつた場合は、認められない。

その三、活動内容とその目的を明確に記入する事。活動内容が学校の理念にそぐわない場合は、部として認められない。又、明確な目標がなければ、部として認めない。

…どうしたものかねえ。

一つ目は、あと一人集まればいいのだから、別に考えなくてもいい。二つ目は、もうすでにある。同好会としても成立つてない集りが、部室を持つてているのはおかしいのだが、お陰で考える必要がなくなつていい。

問題は三つ目だ。文芸部はどこの学校にもありそうな部だし、活動内容は簡単に通るだろう。だが目標がなければ部として認められない。なんかの賞に入るとかじや駄目だうじ、良い目標が浮かばない。とりあえず保留だな。

俺は空を見た。日が沈みかけている空は、色んなものが混ざり合つているように見える。

「まあ一応、文芸部は無事に発進する事が出来ましたーと」歩きながら、俺は呟いた。

其の部、めりきへ始めたものなり

4ページ（後書き）

冬なのにまだ浴室に扇風機があります。
早く止付けないと。
じかつーい。 ファイル001
お楽しみに。

其の者達、学校の人気者なり。 1ページ

文芸部、部長一（仮）

日之道 灯。

一年生の中で、いや学校の中でその姿はトップクラス。先輩だろうがなんだろうが関係なく人気を集めている。

今まで告白した人は少ないので、本人が呼び出しに全くと言つ程応じないからである。

人とはあまり話さないので、詳しいことは謎が多いが、笑顔を振りまく性格でないので、最も笑顔が見たい人N。・1と言われているらしい。

「で、この情報は何の意味があるんだよ？」

俺は持つていた紙を誠人に返した。放課後、教室を出ようと思ったら、誠人から紙を渡された。そこに書いてある事は、灯についてだ。俺は眼を通しながら、ストーカーとしてこいつを訴えようか考えた。

「お前なあ。ここに書いてあること、見てみろよ」

誠人は人とあまり話さないと書いてある所を指差す。

「あまり人と話さないあの日之道さんと、一緒に部活にいるってのが問題だ」

真剣な眼差しを向ける誠人。何なんだこいつ。

「だから？」

俺はほおずえをつきながら聞いた。

「どうしてお前が、日之道さんと一人で放課後一つの部屋にいるんだよ？」

「変な風に言うな！ それに今は一人じゃねえよ！」

「え？」

俺がそう言つと、誠人は驚きの声を上げた。

「二人じゃない？」

「ああ、昨日入部したひどがいるから、一人じゃない」

「なんだそのうらやましい奴は……」

拳を強く握る誠人。

「一応言つておくが、野郎じゃないからな？」

「えつ？じゃあ誰だ？」

キヨトンとして、俺を見る誠人。

「確かに木茎葉さんと原田さんだ。じゃあ俺は部活に行くから」

そう言つて俺は教室を飛び出した。

「遅くなつた理由がそれとはな……」

灯がこちらをジト目で見る。俺の後ろで沙良と香織がこちらを向いている。俺は重たくのしかかる重圧感に耐え切る自信がわからなかつた。油汗がヤバイ。

「まったく、日頃から我を見る奴が多いとは思つていたが、その様な物まで作られてはいるとは」

はあーっと大袈裟おおげさに溜息をつく灯。俺は見ただけなのに、なんでこんなに緊張しなきやならないのだろう。

「でも、それは灯さんがとても魅力的に思われているからでしょう」

香織さんが呑氣のんきな声で言つた。それを聞いた灯は横を向いて

「そ、それなら思うだけにして欲しいものだ。いくら我が魅力的と言つたつて、我のデータの様なものを勝つてに作られていると言うのは気に食わん」

と言つ。

「無視。彼等が勝手にやつてるだけ」

沙良は呆れた声で言つた。こいつは手短に話してくれ。

「ああそつそつ、その紙に書いてあつたんだが、人とあまり喋らな
いつてのは、本当か？」

こいつ、ここ数日文芸部に居ただけでも、人とあまり喋らない様には見えなかつたからな。

だが俺が聞くと、灯は俺に向かつて、複雑な表情をした。

「答えない」

灯が冷たい声で言つ。何か怒らせてしまつたのかな?顔がこわばる。香織さんと紗良は、無言で俺を見ている。

「我的小説に堂々意見するものだから、そういうものはわきまえてると思つていたが…」

溜息をつく様に言葉を出した。

「おい、わきまえるも何も、疑問を口にしただけじゃねえか」

「疑問に思つたからと言つて、何でも聞いていい訳ではないでしょう?」

香織さんが言つた。灯は

「まあ、まだお互い知らない事だらけだしな」

と、諦めた様に言つた。俺はなにがなんだか分からぬままだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9079x/>

我的小説は偉大なり

2011年11月23日09時47分発行